

水の都徳島の人々

西村美東士

1998年、私は徳島大学大学開放実践センターに着任した。2階の研究室から見下ろすと、吉野川支流の助任川の橋がすぐ下に見えた。着任早々、矢も楯もたまらず、荷解きをして釣り糸を垂らした。普段は浅い川なのに、ビキナーズラックで尺に近いキビレ(クロダイの近縁、クロダイより美味)が釣れた。スズキもよく見かけた。海が荒れて小

さな助任川をスズキが大群で遡上してくる様子は圧巻だった。東京では高級魚のスズキだが、吉野川河口でハゼなどを釣っていたら、



写真①:職場から助任川を望む

個人所有の小船(決して裕福ではないのに趣味で持っている)から、スズキを一匹、岸にいて私に投げしてくれる。二匹目も投げようとするので、あわてて丁重にお断りした。家で(素人なので)皮を厚めに剥ぎ、贅沢に刺身にして舌鼓を打った。

釣れたキビレを橋の近くの喫茶店に持っていったら、おかみが上手に料理してくれ

た。その喫茶店では、ランチのほか、子猫をもらったりして、いつも歓迎され(店に入ると肩を押してくれる!)、私の居場所の一つになった。ほかにも、小さな居酒屋、若者がやっているスナックなど、人懐っこい人たちと店に恵まれた。

吉野川の支流は、市内を巡っており、新町川と助任川に囲まれたエリアは、「ひょうたん島」の愛称で広く親しまれている。ひょうたん島では、新町川水際公園、助任川河岸緑地、中徳島河畔緑地等の親水公園や遊歩道の整備を中心として、水際での多様なイベントの開催なども盛んに行われている。地元の若者に「徳島ってなにもないところだから」と言われて、転入してきた若者が「いい場所がたくさんあるのに」と首をかしげていた。まちづくりで徳島を盛り上げている若者と、私はたくさん出会うことができた。その一人は名目もなしに、百人集めるという試みに一人で挑戦して成功させた。使った場所は大神子海岸で、山に囲まれた静かな内海になっており、予約なしで使えるバーベキュー場が整備されている。なんとも贅沢な話だ。ただ、車をもっていないと自由の羽をもがれたようになってしまうのは確かだ。私も、助任小学校体育館開放の地域卓球クラブに所属し、メンバーの車屋さんから安く軽貨物を譲り受け、釣竿を常に入れておいて、家から、数十分の鳴門などにもたびたび釣行した。

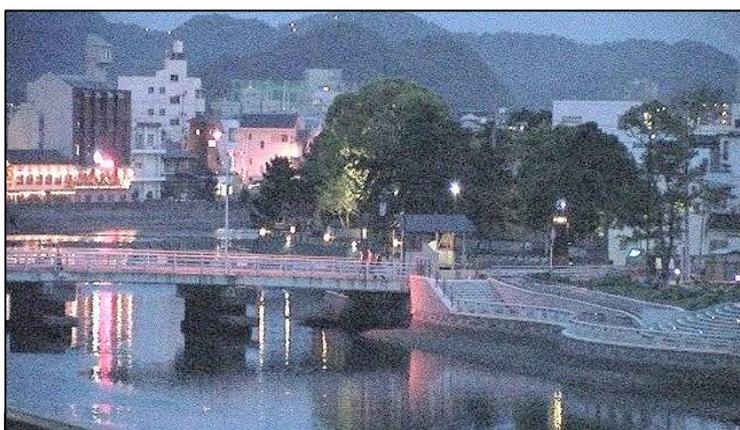
鳴門といえば、台風が来ると、高級リゾートホテルが格安になった。ワイン飲み放題オプション2千円のイタリアンのビュッフェを堪能したあと、露天風呂に浸かって荒れ

狂う海面を見ているのは迫力があつた。

着任した年には、さっそく、当時のセンター長(故廣渡修一氏)が、同じ社会教育専攻のよしみということで、若者ボランティアの代表的人物である川田春夫氏との飲みの席をセットしてくれた。また、徳島市の社会教育課の方々にも顔合わせをしていただき、学遊塾活動(<http://mito3.jp/seika/1760.pdf>)にも関わらせていただくことになった。川田氏は、その後、縁あって私の借家に「居候」することになった。古い家で部屋はいくつも余っていたが、彼が持ち込んだほとんど手作りのイベントの道具が、その一部屋を占めてしまったのには驚いた(実害はなかったが)。川田氏は鹿児島から徳島大学に出てきて、コミュニティラジオのボランティアにはまり、若者のまちづくり活動をしてきた。今は眉山の頂上にアンテナのあるFM眉山に勤めている(<http://www.mito3.jp/seika/2260.pdf>)。

徳島のことを「何年たっても町の景観が変わらないから好きだ」と彼は言っていた。居候した彼とは、夜な夜な豚バラと野菜、キノコの電気鍋をつつきながら議論したことが、とてもよい思い出だ。「西村さんは、儲けることを悪いことだと思っているでしょう」など、たくさんの鋭い指摘を受けた。ふつうは「単身赴任って大変でしょう」とよく言われるのだが、センターのある教授に「いいですねえ、楽しいでしょう」と見抜かれたのは凶星すぎて笑ってしまった。

前任の国立社会教育研修所でも、講師室で弁当(職員は自己負担)を食べながら、一対一で講師の先生と対話することは、受講以上の魅力的な刺激があふれていた。それはまさに「個別最適な学び」だ。各地の受講者との夜の交流も、私の働き甲斐に大いに貢献した。徳島では、一人の工学部の男子学生が、私の市民との飲み会にいつもついてき



写真②:新町川の水際公園

た。酒も飲まず、つまみも食べないので、「きょうはぼくがおごるから、飲んでいいよ」と言ったら、「数学で生きていきたいので、貧乏暮らしの練習をしている」

と彼は答えた。それでも「面白い人々の話が聞ける場」を失うことは、彼にとって大きな損失だと言うのだ。彼は神戸大学大学院に進学した。

最近、とくに行政職員と何かをするとき、彼らは私との会食の機会を持たないことが多いように感じる。事業が終わったら、仲間内で飲むということのようだ。若者たちのイベントでも、終了後は自分たちだけで飲んでいるようだ。でも、それは、大きな損失だと私は言いたい(ウザイじじいだと言われるかもしれないが)。また、そのころから「官官接待」が問題視されていた。身内同士で公費を使って料亭に行くなど、やること

がみみっちすぎる。ところが、批判を恐れて、行政と市民との協議会が昼食をはさむ時間帯を避けてあっさり終わるようになり、夕方の解散後も、市民はどこにも寄らず、自分の家に帰っていくようになってしまった。批判を恐れて「官民交流」を引っ込めるなど、本末転倒も甚だしいと思う。

さて、私の着任2年後、森和夫先生が私の隣の研究室に着任された。それから4年間、極楽とんぼであった私の人生を変えた強烈な「個別最適教育」を先生から受けることになる。水の都徳島での森先生の鋭い毒舌(笑)や徹底的な研究支援、クドバス、育成塾のご指導など、書きたいことはたくさんあるが、紙面が尽きたので、次の機会に譲ることにしたい。

とにかく、水の都徳島での単身赴任生活は、人に恵まれたこの上ない幸せな時間だったことを書き留めておきたい。妻とも月1くらいで、赴任前よりも楽しく会っていましたよ(笑)。